

(平成10年1月7日発行)

会報

第5号

北海道高等学校世界史研究会
事務局 北海道札幌平岸高等学校
062 札幌市豊平区平岸5条18丁目
TEL 011-812-2010
FAX 011-812-2049

平成9年を振り返って

北海道高等学校世界史研究会
第28回大会長 長谷川 圭 作
(北海道札幌南高等学校校長)

20世紀も押し詰まってきた1997年という年は、どんな年だったのだろうか。21世紀へのつながりということを含めて、どう把握しておけばよいのだろうか。

1月、ロシア船籍タンカー「ナホトカ」号が日本海で沈没し、船首が漂着の上、著しい海洋・海浜汚染を引き起こした。湾岸戦争の時の、油にまみれた海鳥の姿と重なり合う風景もあった。同種の事故は、東京湾でも、シンガポール沖でもあった。インドネシアの煙害や地雷禁止条約調印、温暖化防止京都会議などを含めて考えると、環境破壊と危機認識による一歩前進行動が見られたといえよう。

科学技術の進展にも目を見張らせるものがあった。神の御手に預けられていた生命の誕生に係わる領域にも人智が及び、クローン羊や猿が登場させられる一方、宇宙では、火星を探査機が一人歩きしながら映像を地球に送り、宇宙船ミールの事故やコロンビアの故障もアメリカの技術力などで、アポロ13号ほどの心配をさせずに修復作業が行われている。

世界の政情に目を転ずれば、アヘン戦争以来の長期課題であった香港返還ほどではないにしても、北アイルランド紛争・パレスティナ問題・朝鮮戦争に係わる和平交渉が手探りを始めたのも注目したいし、英仏やザイル、韓国などでの政権交代も見逃せない出来事です。

激変する世界の動向の渦中にいる我々は、日々、惹起する個々の出来事に目移りがしてしまい、部分に踊らされることなく、全体像を把握するのが困難なことはわかる。やはり、一定の期間が過ぎて、過去を振り返って見るのでなければ、正当な認識が出来ないというのもわかる。しかし、時間が過去・現在・未来と連続して移動している以上、未来の萌芽が現在の中に存在しており、その中のどれが未来に生き残るのか、互いにしのぎを削りあっているはずだから、感覚を研ぎ澄まして、現在を見続けたいし、せめて、過去の出来事の推移を学ぶことで、現在、直面している問題のミニチュア版を探り出し、現在の方向性を展望する努力をしていきたいものと思います。

第 28 回 研究大会 記録

日 時 平成 9 年 8 月 6 日 (水)
会 場 札幌市教育文化会館

講 演 川合 安 氏 (北海道大学文学部助教授)
研究発表 吉井 優紀彦氏 (北海道芦別総合技術高等学校教諭)
司 会 小華和 靖 氏 (北海道静内農業高等学校教諭)
中山 弘章 氏 (北海道札幌清田高等学校教諭)
記 録 石川 麻紀子氏 (北海道札幌稲西高等学校教諭)
鈴木 涼子 氏 (北海道札幌啓北商業高等学校教諭)

講 演

「九品官人法と六朝貴族制」

北海道大学文学部
助教授 川合 安

今日は「九品官人法と六朝貴族制」という
題で、報告をさせていただきます。

私はもともと南朝の貴族制を研究していた
のですが、貴族制があるということを前提と
して研究してきたわけです。しかし「貴族制」
は本当に貴族制といえるのだろうか、それを
考えるためにはどうしても南朝ばかりを研究
してはいけない、ということになります。

また貴族制を形成するのに大きな力があっ
たといわれている九品官人法(別名:九品中
正法)のことを知らないと、貴族制の研究が
できなくなってしまう。

さて、「貴族」という言葉は中国の学者の
間ではあまり使われていません。「貴族」は
日本の中国史学会独特の用語なのです。

では、「貴族制」という言葉を誰が使い出
したのか、ということを探っていくと話
が見えにくいので、少し古い話になりますが、
大正から昭和初期に活躍した内藤湖南の説か
ら入っていきたいと思います。

内藤湖南の「中国中世貴族制説」ですが、
そもそも「貴族制」などということを出
したのは内藤湖南なのです。内藤湖南の貴族
制説が最もよくわかるのは「概括的唐宋時代
観」という1922年に出た本で、現在も刊行中
の『内藤湖南全集』の第8巻に収録されてい
ます。

内藤湖南は唐から宋への変革を、中世から
近世にかけての変革ととらえていて、政治の
面では、貴族政治から君主独裁政治への変化
というのがメインの主張になっています。そ
れについて次の4点を指摘しています。

第一点目は「貴族政治は六朝から唐の中期
までを最盛期とする。」ということです。補
足すると、漢やそれ以前も貴族政治なのです
が、典型的な貴族政治というのは六朝から唐
ということです。それで、六朝から唐の中期
を中世ととらえ、それ以前を古代というよう
におおまかな時代区分を行なっています。

第二点目は「中国中世の貴族は制度として天子から領土・人民を与えられたというのではなく、その家柄が自然に地方の名望家として永続した関係から生じたものである。」貴族は封建領主ではなく、地方の名望家であり、家系の永続性が見られることを指摘しているわけです。

第三点目は「中国中世の君主は貴族階級を代表する地位であったが、近世になると貴族が没落し、君主は臣民全体の公の所有物になり、貴族団体の私有物ではなくなった。ただし、君主は臣民全体の代表者とはならず、君主自身が絶対権力の主体となった。」

第四点目は「中国中世の政治は貴族と君主の協議体である。」これは現在の世界史の教科書などにもいまだによく出てくる唐の三省制度というものですが、「唐代における政治上の重要機関は三つあった。曰く尚書省、曰く中書省、曰く門下省である。その中で中書省は天子の秘書官で、詔勅命令の案を立て、臣下の上奏に対して批答を与えることになっているが、この詔勅が確定するまでには門下省の同意を必要とする。門下省は封駁の権を有して、もし中書省の案文が不当と認めるときには、これを駁撃し、封還することもできる。そこで中書と門下とは政事堂で協議して、決定することとなる。尚書省はこの決定を受け取って執行する。中書省は天子を代表し、門下省は官吏の世論、すなわち貴族の世論を代表する。形式的なものではあるが、もちろん中書・門下・尚書ともに大官はみな貴族の出身であるので、貴族は天子の命令に絶対に服従したのではない。」全部の教科書を調べたわけではありませんが、山川出版社の教科書などにはほぼこのまま採用されています。

この説に対して、貴族の世論などではなくて、中書省から回ってきた詔勅の原案を封駁するのは、詔勅に誤りがあるとはいけないから慎重を期しているだけだという説もあって、これは本当は簡単にはいかないのですが、一

応これを非常に重要な根拠として内藤湖南は貴族政治ということを主張したのです。

内藤湖南の「中国中世貴族制説」というのは以上のようなものですが、唐の三省制度の例示にも見られるように、主として唐代についての知見によって構成された学説で、六朝時代はほとんどありません。内藤湖南は六朝時代をあまり研究していないのです。この点はやがて湖南の弟子の岡崎文夫によって解明されます。岡崎文夫に行く前に、どうして内藤湖南はこのようなことを言ったのかというと、これは実は単純に研究したからというのではなくて、彼の生きた時代の現代史への興味から来ているわけです。それは1914年に初めて出た『支那論』という本に見えるのですが、辛亥革命が起こって中華民国ができた直後、日本では大正デモクラシーのときの雰囲気がよく出ているのではないかと思うわけですが、「黄宗羲（明末清初の中国の思想家）は明末において書いた議論においては、君主の権力が過大なのが近來の政治の弊害であるから、これを昔の官吏と君主の間に権力のはなはだしい相違がないような世の中にかえそう、つまり昔の貴族制にかえそうという議論をやっているが、君主独裁政治の弊害が極まって、また貴族政治にかえるというよりか、他の政治に変わるといことが、大勢の自然であるとするのが至当である。そこへもってきて支那は近來外國に接触し、外國に留学生をも出したがために、新しい時代の進歩した政論を聞くことになって、ついに共和政治というような政体を知り始めた。そこで、黄宗羲などの考えた貴族政治にかえるべき大勢が、今度は一転して共和政治に向かってきたのである。一方には人民の力が伸びる傾きになって来ている。そこに共和政治の思想が入ったのであるから、実はまだ人民の政治上の知識の準備としては、共和政治を組織するには十分ではないけれども、とにかくもとの貴族政治にかえるよりか、新しい政治に入る方が自

然の勢いなので、それで今度の（辛亥）革命というものは、支那の状態からいうと突飛なものであるけれども、新しい局面に向かって進んできたのである。これはだいたい世界の大勢であるといってもよろしいが、独裁君主のようなものがまた起こって、あるいは袁世凱のような人が帝王の位につくとしても、それは大勢には背いているので、今のところでは民主的勢力というものが伸びて行き、そうして貴族というものは到底復興できないという以上は、結局共和政治に変わるよりほかの道があるまい。」要するに中華民国の共和政治は、袁世凱のような人間が出て来てちよつとつまずくかも知れないけれど、結局は成功するのだという非常に楽観的な見通しをこの時点では述べています。内藤湖南という人も昭和初期になるとかなり中華民国の混乱に嫌気がさしてきて、中国に対する見方がだんだん冷ややかになっていくのですが、まだこの頃は非常に暖かい目で中国を見ている時期です。貴族政治というのは、内藤湖南が中国の共和政治にまだ希望をもっていた時期に書かれたものなのです。晩年の内藤湖南に聞いてみると、また違ったかも知れないのですが、貴族政治というものは辛亥革命以後の共和政治に対する期待、要するに中国にもかつて独裁君主などなかった時代があって、共和政治のようなものができる素地があったということをも主張している、それと重なって貴族政治というものが言われているのです。最近香港が返還されて、中国に民主政治ができるかという議論がありました。1989年の天安門事件の際にも同じようなことが問題になりました。最近は非常に冷ややかな議論が多いような気がします。そのような観点からみると、非常に現代的な議論だと思えます。この時代は日本史でも中世の封建貴族制から絶対君主制、それから共和制ないしは民主制に変わるというような、西洋の政治の変化をそのままもってくる発想がありました。

それから内藤湖南説をそのまま魏晉南北朝においても検証したのが、二番目の岡崎文夫の説で、『魏晉南北朝通史』です。九品中正法について、日本で初めて本格的に論じたのがこの人です。そこで明らかになった点を四点挙げてみます。まず「九品中正法の九品とは人物の等級であり、中正とは等級をつける職である。」人物を評価して一品から九品までランクがつく訳ですが、「この制度により地方豪族出身者が推薦されて官職に任用され、貴族制を形成していく。」これは現在の教科書などにほぼこのように使われています。

第二には、「中正が強い影響力をもつのは249年以後、司馬懿が州大中正を設置して以後のことである。」九品中正法にも二つの段階があって、まず220年に九品中正法ができ、それが大きな影響力をもつようになるのが249年。その原因を作ったのは司馬懿（西晋王朝をつくる司馬炎の祖父にあたる）で、この人が州大中正をつくってから力が大きくなったわけです。現在もこういう考え方は受け継がれています。

第三に、「中正の役割には人物の推薦以外にその管内の世論の統一を図ることがある。」この辺はあまり言われていないことではないかと思えます。難しいことなので世界史の教科書にはあまり出ていないのですが、顧炎武の『日知録』や趙翼の『二十二史劄記』などの考証学の成果をつかって、清議の内容が「要するに家族道徳律に違反するもの」の排斥であると主張しました。管内の世論と言っても、ヨーロッパの中世の身分制議会だと税金が高すぎるから少しまけてくれなどというのが多いのですが、中国では世論というのは人物の評価・家族道徳律で、税金がどういったようなことは史料には出て来ません。これは今後調べると面白いのではないかと思います。

「中正が官僚に果たした作用を権力の分散という方向で理解」というのは中正が人物を

推薦するわけです。実際採用するのは尚書省の吏部というところで、吏部が勝手に採用するのではなくて、時には中正と吏部がケンカをすることもあります。権力が集中しないように分散させる、これも貴族制の権力分散の傾向を想起させるものです。中正というものがいて、官吏を採用する当局側と対決するということにも貴族制というものの具体像をみることができるという研究です。

その他にもまだまだ皆さんの研究があるのですが、大きいところだけを紹介します。

三番目の宮崎市定の『九品官人法の研究』ですが、もともと史料的には九品官人法と続けて読んだ方が正しいのです。

第一にそもそも、九品中正と言っていたのを、10世紀の宋あたりから通称化した呼び方で、「古くは『魏史』巻二十陳羣伝、『通典』巻十四にあるように、いずれも九品官人の法と読んでいた。そこで『資治通鑑』巻六十九、魏文帝記本文には、正しく九品官人法とあるものを、胡注はことさらに〈九品中正はこれより始まる〉と言ひ換えている。」名称などはどちらでもいいもののようですが、「九品官人法とはまさしく九品によって人を官人に登用する方法である。これを九品中正と読んだために、従来の研究は中正のほうに偏りすぎて、本当の官人法が留守になってはいないか」という批判を行なっています。中正の影響ばかり薫っていて、どうやって人間が官僚に採用されていくのかのシステムが理解できていないのではないかという批判です。

『魏史』というのとは正確に言うと『三国志』の魏書のことですが、これの陳羣伝には「九品官人の法を制するは、羣の建つところなり」という一文があり、九品官人法は陳羣の建議によってつくられたものと出ています。名称は九品官人法でいいと思いますが、これについてもいろいろ議論があります。九品官人法がつくられたときの記録はこれしかなく全く説明がないために、九品と官人の間に点

を打って考えなくてはいけないと言う人もいて、私はそれは違うということ論文にしました。つまり九品と官人の法をつくったのはそれぞれ別な人で、官人の法は陳羣がつくったが、九品の法は別な人物がつくったのだということですよ。

第二に、これが宮崎市定氏の研究の中で最も重要なことなのですが、岡崎氏は郷品（中正の九品）と官品（官階の九品）との間の関係はよくわかりませんでした。宮崎氏は中国の官僚の伝記を調べ、郷品と初任官の間に関係があることをつきとめました。

第三に、漢代の郷里選から魏晉南北朝の九品官人法、そして隋の時代になって科挙制度ができあがります。これについて宮崎氏は非常に面白いことを言っています。漢代の郷里選は秀才登用制で、郷里の評判を聞いて推薦するわけですが、結局全部豪族になってしまい、貴族制のようなものの萌芽は漢代からあった。豪族と貴族はどのように違うかという、実はそれほど違わないのです。そして九品官人法ですが、これはもともと貴族制を成立させようと考えてやったわけではなくて、いい人材を取ろうと思ってやった結果がやはり全部貴族になってしまったということです。この次に科挙が出てきます。やはり貴族の息子が勉強ができるということで出てくる。その後印刷技術が発達して、書物が少しお金を出せば庶民でも買えるという時代になると、庶民でも勉強さえすれば科挙に合格できる、つまり隋・唐の時代にはあまり効果を発揮しませんが、時代が下って宋代になると貴族制を崩壊させる。これは非常にわかりやすい相関図を形成しています。

また三國時代から唐までの社会というのはどういうものかということについての発言をしています。非常に有名な文章ですが「三國から唐に至る中国の社会は、大体において貴族制度の社会と名付けることができる。さればといってすべての事象が貴族制度だけで割

り切れるものではない。ここにはこれに対する君主権が厳存して、絶えず貴族制を切り崩して、これを純粋な官僚政治に変形せしめようと努力していたのだ。実はこの君主権の存在こそ、貴族制を貴族制に止まらしめたのであって、もし君主権がさらに微弱であったならば、この貴族制はもっと割拠的な封建制度に成長してしまっただかも知れない。むしろ本質的には封建制が出現すべき社会だったものが、君主権の厳存によって貴族制という特殊な形態をとったと考える方が真相に近いかも知れない。」これをみると内藤湖南の問題意識が受け継がれていると思います。

第四に貴族制を官僚制としての側面から解明した説もあります。特に制度の面に引き付けられた研究者を二人挙げておきます。矢野主税という人は貴族といってもやはり官僚である、それほど土地を持っているわけでもないし、給料のようなもので生活しているということをこの人は一生懸命に言っていますが、これは寄生官僚といひまして、かなり極端な学説です。『門閥社会史』『門閥社会成立史』で述べていることですが、官僚としての貴族がいかに上手く皇帝のご機嫌をとったかという、そういう本です。

もう一人、越智重明氏。君主権の作用について、皇帝の権力を非常に重視した政治社会制度史をやっています。『魏晉南朝の貴族制』などたくさんの本を精力的に出している人で、特に貴族の実態と関わる東晉南朝の身分制について非常に詳細に研究した「族門制論」を提起しています。

第五に「豪族共同体論」ですが、この「豪族共同体」という概念は非常に難しいものです。矢野氏と越智氏は貴族は官僚だったということにとらわれ過ぎているが、もう少し貴族制研究の出発点に戻って、君主権を下から支える、「貴族から君主」の関係を研究すべきではないかという考えです。谷川道雄氏の「六朝貴族制社会の史的性格と律令体制への

展開」という研究史をまとめたもので非常に影響力のある論文です。この論文が出たために、寄生官僚論の矢野氏や越智氏が批判されてしまいました。この人は、宮崎市定氏の研究をみんな読み間違っている、こういう観点から読まなければいけないのだと言って、

「官品が郷品によって決定されるという事実は、貴族の身分・地位がいくら王朝権力に付与されているかに見えても、本源的にはその郷党社会における地位・権威によって決定されるものであり、王朝はそれの承認機関（もっともこの承認は大きな効力を発しめるのであるが）に過ぎないことを示すものと解される。」王朝はただそれを承認するだけで、その官僚としての地位は下の方で勝手に決めている。だから下から上へのベクトルを重視しなくてはいけないのではないかということで、端的に言えば貴族を貴族たらしめるものは根源的には王朝内部にはなく、郷党社会にあるので、王朝も朝廷の中だけいくら詳しく勉強してもだめだ、ということを書いて、さらに、「その承認手続きこそ九品官人法であるということもできる。」つまり、見方を逆にしなくてはいけないということです。同じような方向で、川勝義雄氏も研究しています。この人には研究書もあるのですが、講談社の『中國の歴史』第三巻の“魏晉南北朝”が非常にわかりやすいのでこちらを引用させていただきます。

後漢末の豪族の領主化傾向、豪族が土地を破産した農民などから奪って広げていきます。そんなことをやってはいけないのではないかと、という人達が同じ郷里社会にいるというのが豪族共同体論なのです。「抑止力としての郷論（清議）を重視する。」後漢末にはそういう状況もあったということです。

ところがこれがそうもいなくなってくる。黄巾の乱は全国的な反乱になったわけですが、これ以後の戦乱による崩壊と九品中正法の空洞化によって村の中の世論が顧みられなくな

っていく。そもそも村自体がなくなっていくというところもたくさんあったわけで、それでも人物評論家が存在し続けた。川勝氏は「貴族の社交界」においては厳しい人物評論が行われており、そのような場では、「貴族も家柄に安住することを許されず、知識と教養に精進する」つまり貴族の子なら誰でもいい職業につけるというわけではないのです。郷里社会で農民から土地をまきあげているような、そういうことを批判する勢力はなくなってきたけれども、貴族同士が互いを批判するような雰囲気は残っていた。だから後漢末の郷論のしっぽみみたいなものはずっと残っていて、それが貴族社会のまとまりのようなものになっていた。少し苦しい気もしますが、そういう議論があります。

続いて六番目の「古代専制国家論」です。貴族制があったのだという議論と、貴族は皇帝に寄生しているだけで、中国は君主権が非常に強い社会なのだという議論があります。やはりこうなってくると秦の始皇帝から辛亥革命まで同じような皇帝専制体制としてとらえられる貴族制というのはとてもインパクトがあります。渡辺信一郎氏の「天空の玉座—中国古代帝国の朝政と儀礼」。これは非常にインパクトのある研究書で、「漢代から隋唐にいたる国家の特質は、国家の組織性がかなりゆるやかである。対外的・対内的に幾層の部分から成り立ち、強固な集権的性格を欠いている点にある。」専制国家というといかにも皇帝が強くて、他のものを圧倒的な力で押さえ込んでいると想像しますが、専制国家といってもいろいろあり、「ある程度の統一性はあるものの、中心から周辺へと向かう、あるいはその逆の整然とした組織的統一性を欠いているのが中国古代国家の特質である。中国古代の専制国家は、往々にして強力な支配力を持つ中央集権国家とみなされ、不当に誤解されている。後漢以降の尚書台、あるいは唐代の三省六部制度、戸籍制度とそれにもと

づく税役収取と人民支配など、皇帝権力とそれを支える組織制度のハードコアが存在するが、国家の全体的な組織は粗構造を特質としている。」国家の組織が全体的にがっちりした構造ではなくて、柔軟であったということで、「それは国家がその上に立つ社会内部における家父長制の粗構造、中間諸団体・村落の粗構造に対応している。」

矢野氏は非常に強い皇帝権力に貴族がすりよっていく、そういう理論ですが、渡辺氏の専制国家論はそういうものではなくて、専制国家イコール即停滞論、中国の歴史は停滞してずっと専制国家が続いているということとはちょっと違った「専制国家論」ですね。貴族制・独裁君主制・共和制と、西欧をモデルとした発展段階を分解して、最近貴族制などという少し恥ずかしいということにもなっていて、中世貴族制の概念そのものの有効性が問われる時期にきており、そういう流れに渡辺信一郎氏らの研究はなっています。

最近買った『新書アフリカ史』という本に衝撃的なことが書いてありました。「アフリカ人の歴史家は、トレバーの〈アフリカは歴史なき大陸〉論に対抗するために、アフリカにも歴史があったという証拠を徹底的に収集したが、そこで出してきたものは優雅な宮廷文化と階層化した貴族社会というもので、まさに「貴族制社会」そのものとして、こんなものがアフリカにもあったということで、彼らはこうやって歴史を発見した。しかしこれは形を変えて歴史の歪曲だった。」これはヨーロッパ的な歴史の展開をスタンダードとする進歩史観を共有していたからで、ヨーロッパ的な歴史を展開しようとする点では同じだ、ということですね。「宮廷があって貴族がいる社会が進んだ社会で、固定した権力者をつくらない無頭制の社会は遅れた社会という基準は普遍的なものではない。」と言われると、自分のやっていることは非常に古いのかなと思います。でも階層化した貴族社会などと

いうのはあるとすればそれを対象とした歴史研究というのも非常に大切だという気がするので、そこに一縷の希望を見出し、また最近中国史においても漢民族だけではなく、大きな国家組織をつくってこなかった少数民族の研究にも目を向けられるようになってきました。同じような流れが中国史にもあるのですが、しかし中国史の場合は圧倒的に国家権力を形成してくる流れの方が多く、これからまだまだ貴族制などもやらなくては行けないと思っています。

でも、それを貴族制と言っているのがどうか、今までの視点を変えなくては行けないという気はします。あまりにスタンダードな西洋寄りの進歩史観というものを少し払拭していかないとこれからの研究は上手いかないような気がしています。

一方で谷川氏は『中国史上の古代と中世—内藤湖南への回帰』で「内藤湖南の説は決して古くはなっていない。」と湖南の『支那上古史』の緒言の記述を引用しながら述べています。決して湖南はヨーロッパの歴史にすり寄っていない、逆にヨーロッパ的な観念を使いながら、実は中国が歴史の本流であると言っている、だからヨーロッパ流のものを適用したという批判はあたらないのだ、ということです。「内藤説が単なる西洋モデルの中国への適用ではないかということから、新鮮な問題に気が付くことも可能であることは事実である。」

私は内藤湖南が大好きです。ただその発想が西洋モデルであることは否定できません。貴族制から君主独裁制というのは、西洋の歴史が頭にあるというのは否定しようがないです。また中国の歴史というのは外部からあまり影響を受けないというのも、日本などはヨーロッパの影響を受けて近代化した、ヨーロッパもゲルマン民族がやってきて変わった、しかし中国は、外部の影響を受けにくいから変化があまり目立たない形でドラスティック

に変化していくのだという説なのですが、やはりそうはいうものの、魏晉南北朝時代には、仏教という外来の宗教が貴族に非常に影響がありました。魏晉南北朝の中国人は本当はインドが中国ではないかなどということを書いていたぐらいで、そういうことを考えると、外国の影響も無視できないということで、湖南の説から「自由な立場に身をおく」時期にきているわけです。

『魏晉南北朝隋唐時代の基本問題』という本の中の谷川道雄氏の総説で、1980年代以降の論文について以下のことが書いてあります。「結局は先人の作った枠組みの中でこれを追認し、あるいは枝葉の部分の修正を試み、という、研究の停滞化と瑣末化を感じざるを得ない」とありまして、そういう批判を甘みしつつ、当分の間は試行錯誤を続けざるを得ないと思います。

研究発表 1

「専門高校（工業・商業）における

世界史授業の実践」

—他教科との連携による

体験・作業学習の意義—

芦別総合技術高等学校
教諭 吉井 優紀彦

1. ねらい

専門高校の生徒特有の「座学は息抜き」という根底の意識を払拭し、基礎学力や学習意欲、学習習慣が欠如している生徒の現状をふまえて、生徒の興味を引き学習意欲を喚起させる授業を行うため、作業・体験学習を重視し、生徒を授業の中心に据える。身近な何気ない素材から問題意識を喚起し教材化するため、他教科や地域との連携をはかり授業を行う。実習授業終了後、個人ないし班毎に感想をまとめ提出させ、意見交換を行う。

評価については、授業への取り組み（忘れ物、提出物、私語や内職、ノート提出）を6割、試験の結果を4割の割合で行う。通常の授業に集中できていれば、多少試験の結果が悪くても評価1はつかない。

2 実践例紹介

①地球の歴史から世界史的な環境を考える 授業

世界史の授業の導入として、約45億年といわれる地球の誕生から現在に至るまでの歴史を総括的に概観し、生徒に世界史のアウトラインをつかませるための作業学習の一つとして実施する。その一例として地域に存在する中生代白亜紀の地層中に存在するアンモナイト等の化石を実際に手に取らせ、人類誕生

以前の地球環境について取り上げる。また、班毎に恐竜模型製作を行い、恐竜の絶滅理由として、中生代から新生代への環境の変化を説明し、人類の生活環境との対比の中で、周囲を取り巻く環境の大切さ（地球環境問題）について考察させる。

②地歴科・家庭科合同世界史授業

毎年衣食住をテーマにした授業を家庭科と合同で実施している。ここ数年では特に生徒の関心の高い衣と食に関して、両科の共通単元を事前に設定し、実施時期を調整している。

◎衣について：

3年生商業科（情報処理科、事務情報科）の女子生徒を中心に、歴史上の有名な人物や中国の少数民族の衣装などの作成をし、同時に生地素材や色彩強度などの特徴も調査、研究を行った（しかし、事前準備が整えにくいこと、実施学年である3年生3学期の授業時数の不足などから、試行実習で終了した）。

◎食について：

3年生工業科（電子機械科、電気・電子科）の男子生徒を中心に、大航海時代の食生活をテーマに、新大陸からヨーロッパにもたらされた食材を取り上げたり、香辛料の種類や味覚、使用目的などの事前学習を行い調理実習を行っている。

〈平成8年度実習内容〉

テーマ：

大航海時代のヨーロッパの食文化を考える！
・ヨーロッパを飢えから救ったジャガイモの奇跡を当時のイモ料理から考える。

試食品目：スパニッシュオムレツ、バイクドポテト、ピシソワーズ

内容：

事前指導、調理実習、試食、感想のまとめ記入、片づけ・清掃作業

事前指導～大航海時代にヨーロッパに渡った食材について調査をさせ、模造紙にまとめさせ、発表会を行う。ジャガイモの特徴（低

温でよく育ち、短期間で多くの収穫が可能)ゆえ全世界に広まったこと、アイルランドの悲劇など紹介。調理方法などをビデオなどで紹介。

③地歴科・英語科合同授業

毎年、ホームステイやビジネスで地域に住む外国人を講師として招き、歴史や文化における外国と日本の相違点などを題材に講演会を行っている。外国について知り、異文化理解を進める上で有効であり、新鮮な感動となって文化や歴史の深い認識に結びついている。

④電子機械科・地歴科合同授業

平成8年度の専門教科との取り組みの一つとして、電子機械科の諸施設を利用し、作業学習による教材用の蒸気機関車の製作を試行した。英国で始まった産業革命では、蒸気機関車の発明が交通の発達に革命をもたらし、物や人の大量輸送を可能にした事実をふまえて、蒸気機関の仕組み・動力としてエネルギーに転換される過程を理解させる一助にしたいと考え実施した。

溶接作業は4時間にも及んだが、生徒は難しいながらも、手応えを感じ実習を通じて学習することの喜びを感じたようである。

〈平成8年度実習内容〉

テーマ：産業革命期に発明された蒸気機関の仕組みと鉄道交通に果たした蒸気機関車の役割について考える。

内容：事前学習（1時間）、実習作業（4時間）、まとめ（1時間）

事前学習～

蒸気機関の発明、蒸気機関車の改良による鉄道交通の果たした役割についての考察

実習作業～

蒸気機関の仕組みについて再確認を行った後、実際に蒸気機関車の金属加工用教材を用いての蒸気機関車製作

まとめ～

英国の産業革命がもたらした社会的変化と他地域への波及

※平成9年度には、更に教材用にだけでなく実際にボイラー装置を取り付けた蒸気機関車（SL）の製作を板金加工の段階から金型として取り出し、溶接過程も含めての作業を電子機械科の教諭と連携を図りながら実施したいと考えている（この準備のため、ガス溶接技能講習を終了し、第2種ボイラー技師、危険物乙4類、第2種電気工事師の資格を所得し、生徒の実習作業指導のためにいかしたいと考えている）。

⑤人・モノ・情報による世界史授業 人：

世界史の授業の始めに、生徒が世界で活躍した人々をどの程度知っているのかアンケート調査を行っているが、ほとんどの生徒が断片的な知識しか持ち合わせておらず、興味や関心もさほどない。このことから、意識付けの必要性を感じ、世界史新聞を定期的に発行したり、授業に視覚教材を用いるなどを始めた。中でも、人物については、伝記漫画などによりその人物の生きた環境や時代、生きざまなどを取り上げ、自分とオーバーラップさせることにより、その時代や人物に興味を持たせ、将来に影響を与えたいと考えている。

モノ：

今、目の前にある身近な物にも驚くような歴史があることを知り、「なぜ、どうして」という探求心を育てるために、実物を手に取らせるだけではなく、発表会などの機会を持つ。発表会では、生徒に調べさせて模造紙などにまとめさせる。

情報：

古新聞も含めて、新聞が教材として利用価値が高い。同じ記事でも人により受けとめ方が違い、記事内容が身近な話題から世界事情まで生徒の興味に合わせて活用できるからである。授業最後の10分を利用し、スクラッ

プさせることも実施しているが、生徒に各家庭から記事を持ち寄せ、生徒同士比較をさせることで、他者との興味の違いが認識できたり、新聞を読む習慣が身についたり、家庭での会話が增えるといった副産物的なこともあった。

3 最後に

以上のような視点から、世界史の授業において生徒の中に問題発見能力や課題意識を持たせて取り組むことができたらしと感じ、日々困難な状況の中で試行錯誤をしながら行っている。今後も試行錯誤の連続だが、少しでも世界史の授業そのものに興味・関心を持たせ、教材化の視点を磨いていけるように努力を続けたいと思っている。

4 質疑・応答

Q.

①他教科と合同で授業を行う場合、時間割を動かすことになり、教務部の協力が必要になると思うが、教務部にいかに協力を求めたか。

②家庭科との合同授業で、商業科の女子には被服、工業科の男子には食物を取り上げて実践学習を行ったようだが、女子実習時に男子は何を、男子実習時には女子は何をしているのか。また、実習内容が違えば、互いに未習のものをやりたいなど要求は出ないか。

③電子機械科・地歴科合同授業の蒸気機関車製作は全科で行ったのか。また苦勞した点・失敗談など教えて欲しい。

(札幌星園高等学校 佐々木雅男)

A.

①他教科との合同授業は、先ずその教科と連絡調整を行う。専門学科の実習時間は動かせないことから、教務部に対して、準備も含めて最低1ヶ月以上前に内容等を連絡する必要がある。

②違う科が実習をやっているときには、その科の実習内容や過去の授業内容をスライドを見せるなどして紹介し、生徒から希望を聞く

ようにしている。同分野で、ある科だけ実習をやるのは片手落ちであるので、生徒の要望を取り入れ、授業内容に極力近い分野で、その科の特色を生かせるような実習を、時期をへだてて実施するようにしている。

③失敗談はたくさんある。工業が専科なので、普通科の教科が実習を行う場合、協力者を探す必要がある。また、時間内に終わらないことや、溶接時のやけどなどのケガへの配慮が必要である。

研究発表2

「新入教員のための、すぐに 授業にいかせる実践講座」

①鈴木広基(岩見沢農業)

「農業高校でのプリント学習の取り組み」

②木村哲也(札幌厚別)

「新入教員時における世界史の教材」

③出口敬智(名寄)

「授業に生かせる実践講座参加資料

—音楽教材・絵画教材・体験的学習・実物教材・視聴覚教材の利用について—

④吉嶺茂樹(札幌西)

「世界史板書ノートの試みについて」

⑤赤間幸人(札幌東)

「世界史授業を通じた国際理解の実践」

—現代中国人の、日中の歴史及び日本人に対する見方を知る

(程艶春先生による授業を通して)

⑥田中一秋(札幌平岸)

「世界史学習における総合化

—10学級一斉指導における4×35時間の実践」

⑦中山弘章(札幌清田)

「基本的・基礎的な内容を重視した作業学習の展開 —世界史日の作業学習の試みについて」

《新刊紹介》

『岩波講座 世界歴史』

(岩波書店)

私が旧『講座 世界歴史』と出会ったのは学生時代である。すでに学会で重鎮として活躍されていた先生方が若くして書かれていた論文を読まされた記憶がある。専門課程に上がってきた学生が、まず何をやるにしても、「講座」は押さえて置きなさい、といわれたものである。それからおよそ30年。まったく新しい書き下ろし講座として、『世界歴史』の刊行が始まった。昨年紹介があった中央公論社『世界の歴史』と比較して読んでいくと、一般書と講座ものという形態を越えて、そこに今日の歴史学が抱えている問題を見通すことができる。特に岩波『講座』は、それが学会の「最高水準」を唱えている以上、様々な困難、「あれもこれも盛り込まなければ」という問題に直面せざるを得ない。また、近年出版された様々な世界歴史企画(例えば歴史学研究会編『講座 世界史』全12巻)との「差異化」をどの程度とるのかといった所に読者の興味は向けられるであろう。

本「講座」は、現在3巻が刊行されている。紹介者はそのうち2巻を見たが、ビジュアル度は当然なもの、大変面白く読ませていただいた。全巻の巻頭に置かれた「構造と展開」と題する概説は、その時代の「通史」を提供してくれる。「境域と局所」という部門では、各地のマイノリティに焦点を当てて同時代史を浮かび上がらせる。旧「講座」が全巻、「文明・地域ごと」に古代から現代までを通史的に追っていたのに対して、それを一旦解体した上で、時代区分にとられない体裁をとり、数世紀を見越して時代の特徴を捉えようとしている。紹介者が見た限りでは、今回のこうした編集方針はかなり成功しているといえるであろう。

例えば第一回配本『環大西洋革命』では、

「境域と局所」に、小山哲「消滅した国家ポーランド」・浜忠雄「ハイチ革命とラテンアメリカ諸国の独立」・見市雅俊「開発原病の世界史」の3本、「論点と焦点」には、和田光弘「アメリカにおけるナショナル・アイデンティティの形成」・姫岡とし子「近代家族モデルの成立」等の論考が並んでいる。紹介者は、授業に使う上で、浜氏の「ハイチ革命は…ラテンアメリカ諸国にとっていわば禁忌の対象として見られた」という指摘や、伝染病から世界史を見る見市氏の指摘に大変教えられることが多かった。ハイチ革命が世界史の教科書に記載され始めて約10年。入試でも「トウサン＝ルーヴェルチュール」は必出の事項になりつつある。だが、「なぜそれが記述の対象になってきたのか」を考えると、事はそう簡単ではない。

世界史が必修になり、現場では逆に「お荷物化」しているという話を随所で耳にする。異文化理解のために、その基礎としての「世界史の面白さと重要性」を生徒に伝えなければならぬのではないか。そして本「講座」の論考にあるように、今や歴史学は周辺諸学問との境を急速になくしつつある。そうである以上、われわれ世界史教師も幅広く知識を仕入れ、わかりやすくかみ砕いて教えることが必要になるだろう。「地理・日本史・政治経済・倫理」への基礎科目としての世界史をどう組み立てていくかである。特に今回の講座の特徴である、「世界史の同時代性を捉える7つのテーマ」に属する巻には、教材として活用する際に典拠として使えるような論文が並んでいる。いわゆる「周辺地域」への論考が多いのも今回の特色であろう。今後の続巻に期待したいと思う。

(札幌西高等学校 吉嶺 茂樹)

メモリーバンク 世界史問題集

B 6 判 1 9 8 頁 索引付き
定 価 5 6 0 円
発行所 清水書院 =好評発売中=

- ① 北海道高等学校世界史研究会の会員の先生方が中心となって執筆。
- ② 定期考査から受験にまで利用できる用語問題集。
- ③ 一問一答問題で基本用語をマスター、付録のチェックシートを利用して応用問題集に変化。今日の高校生の勉強法を取り入れた画期的な問題集。

<執筆者> 赤 間 幸 人 川 音 強 斎 藤 善 之
武 田 秀 治 田 中 一 秋 華 輪 健 治
真 島 勝 彦 毛 利 禎 晴 吉 嶺 茂 樹

歴史地図によるトレーニングワーク世界史

トレーニングワーク世界史編集委員会 編
B 5 判 8 0 頁 付 別冊解答
定 価 4 5 0 円
発行所 山川出版社 =好評発売中=

- ◎ 北海道高等学校世界史研究会の先生方が中心となって、長年の授業体験にもとづいて作成した、地図を主体としたワークブック。
- ◎ 地図による作業と設問を通して、おのずと世界史の基礎的理解が得られるよう工夫。
- ◎ 38のテーマを設け、作業用地図98点を掲載。
- ◎ 地図使用の入試問題対策としても可能。

<執筆者>

赤間 幸人	中村 和之	味村 隆史	富森 英雄	石川 哲朗
中山 弘章	小山内 嵩	野村 秀明	亀岡 敏克	橋本 卓
菊地 守典	華輪 健治	櫛井征四郎	平山 篤夫	窪田 範孝
古木 博	小杉 俊樹	宮浦 俊明	田中 一秋	山口 博
出口 敬智	山田 淳一	鳴海 昌江	川音 強	

充実の世界史・日本史総合資料集

ニュー
ビジュアル版 **新詳世界史図説**

ニュー
ビジュアル版 **新詳日本史図説**

株式会社 **浜島書店** 名古屋市中区栄2-26 (〒466)
電話 名古屋 (052) 733-8040 (代表)

大好評 東京法令の世界史資料集

本当は、世界史っておもしろい!



ビジュアル世界史
A4判カラー・208ページ
大塚こじゅんを筆取り
多岐・イブストの監修



グラフィック世界史A
A4判カラー・142ページ
2冊組A用紙に印刷した
近・現代史の発展

とうほう 東京法令出版 監修 東京法令出版

世界が注目!
初の全ヨーロッパ史ついに完成!

各紙誌掲載!
増刷出来

欧州共通教科書

ヨーロッパの歴史

F・ドルーシュ 著合訳 / 木村尚三郎 監修 / 花上克己 訳

EU新時代に向けてヨーロッパは過去をどのようにとらえ、
未来をどう構築するのか? 12か国の歴史家が3年を費やして
共同執筆したヨーロッパ全体の歴史の統一教科書の完成。
西洋史の枠を越えた総合的な視点からの叙述と、
オールカラーの資料図版・地図多数。

A4変型判
6800円
(税別)

東京書籍

北海道支社：〒064 札幌市中央区南6条西14-1-5 東書ビル TEL.011-562-5721

第29回大会予定

平成10年8月4日(火)
札幌西高等学校・輔仁会館
[例年と会場が変わります]
講師：未定
研究発表：未定(募集中)

編集後記

世界史研究会の会報も、早いもので第5号の発刊にこぎつけることができました。この間の記録者並びに事務局の諸先生のご助力に、深く感謝を申しあげる次第です。しかしその一方で、毎年同じメンバーで編集会議を開いていることの問題点もまた顕在化してまいりました。

来るべき年は、新しい戦力を迎え入れよりフレッシュな内容の会報を目指したいと願っております。

(文責：札幌稲西高・中村和之)